日蓮大聖人御書全集

南条殿御返事（なんじょうどのごへんじ）

（大橋太郎の事（おおはしのたろうこと））

新版
1856
〜
1861

南条殿御返事（大橋太郎の事）

建治2年（'76）閏3月24日　55歳　南条時光

かたびら一つ・しおいちだ・あぶら五そう、給び候い了わんぬ。

ころもはかんをふせぎ、また、ねつをふせぐ。みをかくし、みをかざる。法華経の第七やくおうほんに云わく「裸なる者の衣を得たるがごとし」等云々。心は、はだかなるもののころもをえたるがごとし。もんの心は、うれしきことをとかれて候。ふほうぞうの人のなかに商那和衆と申す人

あり。衣(ころも)をきてむまれさせ給(たも)う。これは先生(せんじょう)に仏法(ぶっぽう)に
ころもをくようせし人(ひと)なり。されば、法華経(ほけきょう)に云(い)わく
「柔和忍辱衣(にゅうわにんにくえ)」等云々(とううんぬん)。
こんろん山(ざん)には石(いし)なし、みのぶのたけにはしおなし。石(いし)なきところには、たまよりもいしすぐれたり。しおなきところには、しお、こめにもすぐれて候(そうろう)。国王(こくおう)のたからは左右(そう)の大臣(おおとみ)なり。左右(そう)の大臣(おおとみ)をば塩梅(えんばい)と申(もう)す。みそ・しおなければ、よわたりがたし。左右(そう)の臣(しん)なければ、国(くに)おさまらず。
あぶら(油)と申(もう)すは、涅槃経(ねはんぎょう)に云(い)わく「風(かぜ)のなかにあぶら(油)な

し。あぶらのなかにかぜなし」。風をじする第一のくすりなり。

かたがたのものおくり給びて候。御心ざしのあらわれて候こと、申すばかりなし。せんずるところは、こなんじようどのの法華経の御しんようのふかかりしことのあらわるるか。「王の心ざしをば臣のべ、おやの心ざしをば子の申しのぶる」とは、これなり。あわれ、こととのうれしとおぼすらん。

つくしにおおはしの太郎と申しける大名ありけり。

油　風　治　薬　物　送　顕　故　信　深　殿　述　親　殿　思　紫　橋　名

大将どの(たいしょうどの)の御(ご)かんき(勘気)をかぼりて(被)、かまくら(鎌倉)ゆいのはま(由比浜)、つちのろう(土牢)にこめられて(籠)十二年(十二年)。めしはじめられしとき(召始)、つくしをうちいでしに(筑紫打出)、ごぜんにむかいて(御前向)申せしは(申)「ゆみや(弓矢)とるみとなりて(取身)、きみの御(君)かんき(ご勘気)をかぼらん(被)ことはなげきならず(歎)。また、ごぜんにおさなく(御前幼)よりなれしが(馴)、いまはなれ(今離)んことというばかりなし(言)。これはさておきぬ。なんしにても(男子)にょにしにても(女人)、一人(いちにん)なきことなげきなり(歎)。ただし、かいにん(懐妊)のよし(由)、かたらせ給(たも)う(語)。おうなごにてやあらんずらん(女子)、おのこごにてや(男子)候(そうら)わんずらん。ゆくえをみざらんことくち(行方見口)

惜おし。また、彼かれが人ひとなりて、父ちちというものもなく無なから
欺んなげき、思いかがせんとおもえども、力及ちからおよばず出」とていで
にき。

かくて月日つきひすぐれば、事故ことゆえなく生まれうにき。男子おのこご
にてありけり。七歳しちさいのとし、山寺やまでらにのぼ登せてありけれ
ば、友達ともだちなりける稚児ちごも、親無おやなし笑」とわらいけり。
家帰いえにかえりて、母父ははに尋ねけり。母述はは、のぶる
方かたなくして、泣なくより外ほかのことなし。稚児もうこのちご申てん す。「天
なくしては雨降あめふらず。地ちなくしては草生くさおいず。たとい母はは あ

りとも、ちちなくばひととなるべからず。いかに父のありどころをばかくし給うぞ」とせめしかば、母せめられて云う、

「わちごおさなければ申さぬなり。ありようはこうなり」。

このちご、なくなく申すよう、「さて、ちちのかたみはなきか」と申せしかば、「これあり」とて、おおはしのせんぞの日記、ならびにはらの内なる子にゆずれる自筆の状なり。いよいよおやこいしくて、なくより外のことなし。「さて、いかがせん」といいしかば、「これより郎従あまたともせしかども、御かんきをかぼりければ、みなちりうせぬ。そ

父人生　ちち在
所隠　たも
責　い
和稚児幼　もう
有様
稚児泣　もう様
父形見
大橋先祖
腹　うち
こ　じょう
日記　じひつ
親恋
泣　ほか
言
ろうじゅう数多供
ご勘気被
皆散失

後生のちは、いきてや、またしにてや、死音信おとずるる人なし」語とかたりければ、伏転泣ふしころびなきて、諫いさむるをもちいざりけり。

母云はいわく「おのれを己山寺やまでらにのぼ登することは、親孝養きょうようのためなり。仏に花をもまいらせ進よ、経きょうをも一巻いっかん読よみて孝養こうようとすべし」と申もうせしかば、急てらいそぎ寺にのぼりて、家帰いえへかえる心こころなし。昼夜ちゅうやに法華経ほけきょうをよみしかば、読渡よみわたりけるのみならず、空そらにおぼえ覚てありけり。

さて十二じゅうにのとし年、出家しゅっけもせずしてかみを髪つつ包み、とかく

筑紫逃出　鎌倉尋

してつくしをにげいでて、かまくらと申すところへたずねいりぬ。八幡の御前にまいりて、ふしおがみ申しけるは、

「八幡大菩薩は日本第十六の王、本地は霊山浄土に法華経をとかせ給いし教主釈尊なり。衆生のねがいをみて給わんがために、神とあらわれさせ給う。今わがねがいみてさせ給え。おやは生きて候か、しにて候か」と申して、いぬの時より法華経をはじめて、とらの時までによみければ、なにとなくおさなきこえ、ほうでんにひびきわたり、こころすごかりければ、まいりてありける人々もかえらん

入　伏拝　参　満願　現　死　寅　戌　始　読　渡　幼声宝殿響　心凄　参　帰

ことをわすれにき。皆人、いちのようにあつまりてみければ、おさなき人にて法師ともおぼえず、おうなにてもなかりけり。

おりしも、きょうのにいどの御さんけいありけり。人めをしのばせ給いてまいり給いたりけれども、御経のとうときこと、つねにもすぐれたりければ、はつるまで御聴聞ありけり。さてかえらせ給いておわしけるが、あまりなごりのおしさに人をつけておきて、大将殿へ「かかることあり」と申させ給いければ、めして、持仏堂にして御経よませまい

らせ給いけり。

さて次の日、また御聴聞ありければ、西のみかど、人さわぎけり。「いかなることぞ」ときしかば、「今日は、めしゅうどのくびきらるる」とののしりけり。あわれ、わがおやはいままで有るべしとはおもわねども、さすが人のくびをきらるると申せば、我が身のなげきとおもいてなみだぐみたりけり。大将殿、あやしとごらんじて、「わちごはいかなるものぞ。ありのままに申せ」とありしかば、上くだんのこと、一々に申しけり。おさぶらいにありける

たま　つぎ　ひ　ごちょうもん　にし　御門　ひと　騒　聞　きょう　因　人　頸切　哀　我　思　今　あ　親　頸　切　もう　わ　み　歎　思　涙　たいしょうどの　怪　御覧　和　もう　稚児　者　かみ　件　いちいち　もう　侍

大名・小名、みすの内、みなそでをしぼりけり。

大将殿、かじわらをめしておおせありけるは、「大はしの太郎というめしゅうどまいらせよ」とありしかば、「只今くびきらんとて、ゆいのはまへつかわし候いぬ。いまはきりてや候らん」と申せしかば、このちご、御まえなりけれども、ふしころびなきにけり。おおせのありけるは、「かじわら、われとはしりて、いまだ切らずば、ぐしてまいれ」とありしかば、いそぎいそぎ、ゆいのはまへはせゆく。いまだいたらぬによばわりければ、すでに頸切らんとて刀

をぬきたりけるときなりけり。

さてかじわら、おおはしの太郎をなわつけながらぐしまいりて、おおにわにひきすえたりければ、大将殿、「このちごにとらせよ」とありしかば、ちご、はしりおりてなわをときけり。大はしの太郎は、わが子ともしらず、いかなることゆえにたすかるともしらざりけり。さて、大将殿、まためして、このちごにようようの御ふせたびて、おおはしの太郎をたぶのみならず、本領をも安堵ありけり。

大将殿、おおせありけるは、「法華経の御事は昔よりさ

抜時

梶原大橋縄付具

大庭引据

稚児取

稚児走下縄

解

大橋

知

故助知

召

稚児様々

布施給

大橋

給

本領安堵

仰

法華経御事昔

ることとはききつたえたれども、丸は身にあたりて二つのゆえあり。一つには、故親父の御くびを太政入道に切られてあさましともいうばかりなかりしに、いかなる神仏にか申すべきとおもいしに、走湯山の妙法尼より法華経をよみつたえ、千部と申せし時、たかおのもんがく房、おやのくびをもて来ってみせたりし上、かたきを打つのみならず、日本国の武士の大将を給わりてあり。これひとえに法華経の御利生なり。二つには、このちごがおやをたすけぬることと、不思議なり。大橋太郎というやつは、頼朝、『きかいな

り『とおもう。たとい勅宣なりとも、かえし申してくびをきりてん。あまりのにくさにこそ十二年まで土のろうには入れてありつるに、かかる不思議あり。されば、法華経と申すことはありがたきことなり。頼朝は武士の大将にて、多くのつみつもりてあれども、法華経を信じまいらせて候えば、さりともとこそおもえ」と、なみだぐみ給いけり。

今の御心ざしみ候えば、故なんじょうどのは、ただ子なればいとおしとはおぼしめしけるらめども、かく法華経をもって我がきょうようをすべしとは、よもおぼしたらじ。

たといつみありていかなるところにおわすとも、この御罪所
きょうようの心ざしをば、えんまほうおう・ぼんてん・孝養閻魔法王梵天
たいしゃくまでもしろしめしぬらん。釈迦仏・法華経もい帝釈知
かでかすてさせ給うべき。かのちごのちちのなわをときし捨稚児父縄解
と、この御心ざし、かれにたがわず。これはなみだをもち違涙
てかきて候なり。書候

また、むくりのおこれるよし、これにはいまだうけたまわ蒙古起由承
らず。これを申せば、「日蓮房はむくり国のわたるといえば蒙古渡
よろこぶ」と申す。これ、ゆわれなきことなり。「かかるこ喜謂

とあるべし」と申せしかば、あだかたきと人ごとにせめしが、経文かぎりあれば来るなり。いかにいうともかなうまじきことなり。失もなくして、国をたすけんと申せし者を、用いこそあらざらめ、また法華経の第五の巻をもって日蓮がおもてをうちしなり。梵天・帝釈、これを御覧ありき。鎌倉の八幡大菩薩も見させ給いき。いかにも今は叶うまじき世にて候えば、かかる山中にも入りぬるなり。

各々も不便とは思えども、助けがたくやあらんずらん。よるひる法華経に申し候なり。御信用の上にも力もおし

もう　怨敵　ひと　責
きょうもん　限　きた　言　叶
とが　くに　助　もう　もの
もち　ほけきょう　だいご　まき　にちれん
面　打　ぼんてん　たいしゃく　ごらん
かまくら　はちまんだいぼさつ　み　たま　いま　かな
よ　そうら　さんちゅう　い
おのおの　ふびん　おも　たす
夜　昼　ほけきょう　もう　そうろう　ごしんよう　うえ　ちから　惜

まず申(もう)させ給(たま)え。あえてこれよりの心(こころ)ざしのゆわきにはあ弱らず。各々(おのおの)の御信心(ごしんじん)のあつくうすきにて候(そうろう)べし。厚薄

たいしは、日本国(にほんこく)のよき人々(ひとびと)は、一定(いちじょう)いけどりにぞなり生捕候(そうら)わんずらん。あらあさましや、あらあさましや。恐々(きょうきょう)謹言(きんげん)。浅

後三月二十四日(のちのさんがつにじゅうよっか)　　日蓮(にちれん)　花押(かおう)

南条殿御返事(なんじょうどのごへんじ)